

# 白 族 の 本 主 信 仰

新 島 翠

## The Benzhu Faith of The Bai People

Midori Niijima

### Summary

The Bai people, who inhabit the area centering around Erhai Lake in Yunnan province, have their own unique religious beliefs, the Benzhu faith. Benzhu is essentially a village patron God or deity. People of different villages worship different Benzhu Gods. The historical character Benzhu is also respected as a hero who exterminated giant serpents.

Here, along with the introduction of the folktale of Benzhu, I would like to give a clear account of the primitive religion of the Bai people, which is important when thinking of the origin of the Benzhu faith.

Received Oct 22, 1990

Key words : Benzhu faith, folktale, primitive religion

—

白族は雲南，貴州，四川，湖南などに居住しているが，もっとも集中して居住しているのは雲南省大理白族自治州であり，州内の白族人口は白族総人口(約280万人)の80%に達する。白族の自称は「白」「白子」「白尼」であるが，他民族からは「民家」「勒墨」「那馬」「羅苴」等と呼ばれてきた。

白族は仏教，道教，キリスト教等を信奉しているが，他に独自の宗教として「本主」信仰を持っている。「本主」信仰は白族固有の信仰に道教，仏教，儒教の様々な要素が加わって形成されたものである。「本主」とは神の総称であり，村ごとに特定の「本主」を祀っている。ある村では歴史上の人物，ある村では悪龍退治の英雄，またある村では石等等，「本主」として祀られているのは人間，動物，龍，石，山と多種多様である。

本稿では「本主」に関する伝承を中心に、「本主」信仰の特徴、起源などの問題を取り扱うことにしたい。

## 二

「本主」の呼称がどのような意味を表しているのか、いくつかの解釈がなされている。例えば、白語で「私の主人」を意味する「武増」を漢語に訳したもので、各人の運命を主宰する神であり、この世の吉凶禍福は全て「本主」によりもたらされる(秋 1988:46)、ある地区の主宰神であり、その地区、村落の住民の生死禍福を主管する神(張 1981:26)、「本境福主」の略称で、その地の人々の幸せは本主がもたらす(雲南省編輯組 1985:45)、「本境之主」、即ちある村落、ある地域の保護神(李 1984:47)などである。「本主」とは特定村落或いは一定地域の守護神であり、日本における鎮守の神、産土神と考えてよいであろう。

「本主」は通常一村が一つの「本主」を祀るか、或いは数村合同で一つの「本主」を祀る形をとり、村内や村の近傍に「本主」の為の廟を建てている。数村合同で一つの「本主」を祀る場合、必ずしも自然村としての結び付きによって祭祀集団ができるのではなく、水利灌漑を軸として結び付いた集団が合同して祀っている場合もある。(宋 1985:290, 曾 1986) この問題については、「本主」伝承の項で補足したい。「本主」を祀る村及び「本主」の数はどのくらいになるのであろうか。大理地区の「本主」について1940年代に行われた調査の報告には、「大理71村のほとんどが本主廟を持っている。大理に現有する本主廟の神は60神、うち女神が21、男神39。最高神とその妻を加えると、62神となる。」(徐 1979:277-278)と記されており、新中国成立前についての報告では、「大理県の360の村に72の本主廟が建てられており、一村一廟或いは数村が共同で廟を建てている。(秋 1988:47)となっている。1985年に大理市を調査した報告では、「400余りの村を調査したところ、240の本主が祀られていた。」(大理市文化局 1988:244)、また、李纘緒によれば1982年の調査で鶴慶県内に531の「本主」の聖号が確認されたとのことである。筆者が手元の中国の出版物から調べた範囲でも、自治州内の201の村(或いは村集団)が「本主」を祀っている。(資料参照)<sup>1)</sup>

「本主」を祀る廟は壮麗なものと、小型のものがある。鶴慶県の西山廟(本主は山)、下関の將軍洞(唐の將軍李宓を祀る)等は壮麗な建物で、村に面した山の中腹に建てられ、中央に大殿、左右に廳、周囲に小廟、前には舞台を備えている。(雲南省編輯組1985:81-82)しかし、一般の廟はさほど大きくなく、とりわけ洱海周辺の村内に建てられた廟は小さく、一般の民家と区別がつかないほどである。筆者が調査した際、村人から、廟の前庭にガジュマルが植えられていることが多いから、廟をみつけるには大木をさがせばいいと教えられた。大理ではガジュマルは大青樹或いは風水樹と呼ばれ、生命の源として大切にされている。廟の中には土や木で作られた「本主」の塑像が安置されている。立像、座像、騎馬像など形は様々である。「本主」の像だけが祀られていることはなく、「本主」の家族や家臣等の像がと

もに安置されている。「本主」にはそれぞれ固有の祭りの日が決められており（資料参照）、多くは「本主」の生誕日であるが、その日は「本主」の像が廟を出て、輿や馬に乗って村をねり歩き、獅子舞が行われ、きわめてにぎやかである。ほかに、4月25日に行われる「繞三霊」がある。各村の「本主」が「中央本主」の廟に参拝するという行事である。村人が村の「本主」を担いで神都聖源寺に集まり、そこから崇聖寺、金奎寺の三霊場を巡り歩く。豊作祈念の行事であるが、同時に若者達が婚姻相手を捜す場所ともなっている。

### 三

「本主」として祀られているのはどのような神であろうか。「本主」には縁起譚とも言うべき神話伝説が伝えられている。それらの伝承を手掛りにして「本主」を分類すると次のようになる。

1. 自然神
2. 民衆の中の英雄
3. 歴史上の人物——白族／漢族
4. 仏教または道教の神

以下にそれぞれの「本主」にまつわる伝承を見ながら「本主」とはどのような神なのか具体的に考えていきたい。

#### 1. 自然神の伝承

雨季に洪水が起こる。あか牛が洪水の中に入り、ごろりと横になって洪水をせき止め、流れの方向を変える。おかげで村は助かり、以後村では赤牛を飼わなくなり、牛を食べることもしなくなった。（大理市文化局 1988：22）

牛が洪水をせき止めて「本主」となる伝承はいくつか採集されている。雲南の西北に居住する白族の間では数十年前まで祭天の儀式が行われていた。祭天には必ず牛供犠が行われるが、そのために飼育された特別の牛が用いられた。牛を「本主」として祀るのはこうした習俗と係りがあると思われる。自然神の「本主」は、牛の他に石、太陽、木、山等がある。洪水あるいは水とのかかわりで語られるものが多い。

#### 2. 民衆の中の英雄の伝承

大理の村に貧しい親子がいた。娘が谷川で洗濯をしていると、川上から大きな桃が二つ流れてきた。娘は桃をすくいあげて食べた。ほどなくして娘は赤子を宿す。3年身ごもって4年目によろやく生まれる。子は生まれた時すでに7-8才に見えるほど大きく、しっかりとした身体つきをしていた。名を段赤城とつけた。数年後には祖父と共に石運びの仕事始める。

ある年、大理の龍王廟のあたりに突如一匹の蟒が出現する。それ以後毎年春、蟒は子

供の供犠を要求し、拒むと大理一帯に洪水を起こす。段は蟒退治にのりだす。身体に刀をくくりつけ、人々に、蟒が腹を見せて浮き上がってきたら、急いで腹を切り裂いて自分を助け出してくれと頼むと、蟒の口へ跳び込む。蟒の腹の中で刀をふるってあばれまわる。蟒が黄色い腹を見せて浮かび上がる。人々は段を救おうと、蟒の腹を裂くが、段はすでに死んでいる。人々は蟒の骨を焼いて灰にし、斜陽峰の麓に蛇骨塔を建てて段を祀り、羊皮村の本主とした。(李 1980:152-157)

この伝承は「段赤城」或いは「蛇骨塔」の名で語られ、大理の村々でこの話を語らない家はないと言われているほど好まれている話である。そのため異伝も多い。『南詔野史』『白古通記』にも記されているという。(雲南省民間文学集成弁公室 1986:174) 人々の害を除くために戦って死んだ英雄が本主に祀られるという伝承は「段赤城」の他に「狩神杜朝選」「小黄龍」等があり、いずれも洪水を起こしたり、人間を食らう悪龍或いは蟒退治の英雄伝承である。

大理の地には龍に関する伝承が非常に多く見られる。九隆神話の系列をなす建国神話もあるが、多くは悪龍退治の伝承である。

洱海を中心とする白族の居住地は、古来「澤国」と呼ばれた湖と川の多い地である。従って水害も多く発生した。鶴慶、劍川、大理、弥渡、永平は凹地であるため、歴史上もしばしば水害に見舞われている。洪水とは逆に、日照りも人々にとっては脅威であった。自治州内の平均降雨量は848.4mmであるが、地形によって多雨地域と少雨地域とに分かれる。前者は大理、漾濞、永平で、後者は賓川、祥雲である。また、季節的に見れば、初夏は乾燥し、5—6月の農業用水を最も多く必要とする時に雨が少ない。「本主」には雨を司る性格もあるため、灌漑を軸として「本主」を祀る集団が形成されるのもうなずける。鶴慶の場合、「本主」の勢力範囲と水利系がほぼ重なっている。池から水をもらう地区では池を主管する「本主」を祀り、溪流から水の供給を受ける地区では溪流を主管する「本主」を祀っている。こうした情況にあわせ、古代の人々は水と龍を結びつけ、水の恵みも禍も龍のなせる業と考え、神話伝承となったのであろう。そうであるなら、悪龍退治の英雄は人々にとって格別の存在であったと思われる。

### 3—1 歴史上の人物——白族——の伝承

唐の開元20年ころのこと、雲南の西北部は六詔によって割拠統治されていた。蒙舍詔は六詔の中でも強大であり、王は早くから他の五詔を併合する野心をいだいていた。ある時鄧賤詔の王は蒙舍詔の王を招き、妻の慈善夫人にも接待させる。蒙舍詔の王は夫人の美しさに驚く。蒙舍詔王は鄧賤詔王の夫人と五詔とを手に入れようと日夜思いをめぐらし、大理の西に松明楼を建てる。

6月25日、蒙舍詔王は五詔の王を松明楼に招待する。鄧賤詔の王は行けば命が危ないと知りつつ出かけてゆく。夫人は夫に腕輪を渡す。宴会は盛大に行われ、五詔の王が酔

いしれたすきに蒙舎詔王は楼に火を放つ。王達は死ぬ。知らせを受けた慈善夫人は松明をかかげて夫をさがしに行き、腕輪を目印に見つけ出す。

蒙舎詔の王は夫人に結婚をせまる。夫人は夫の弔いが終るまで待つて欲しいと条件を出し、王は承諾する。夫人は松明楼のそばに堂を建てて喪に服したのち、洱海の岸で夫を祀り、そのまま洱海に身を投げる。人々は夫人の勇気を称え、大理北門の本主に祀る。

(李 1980: 166-171)

この「本主」伝承は7世紀に成立した南詔の起こりを語ると同時に、松明祭りの由来譚にもなっている。松明祭りはチベット・ビルマ語系の諸族（彝、白、納西、僂僂等）の間で行われているもので、豊作の予祝行事である。6月24日か25日、村毎に大きな木を建て、果物や花を飾り、夕方これに火を放つ。小さな松明も作られ、これを持って村の通りや田畑を歩きまわり、虫を焼き払い、田公地母を祀る。松明祭りの時は闘牛、競馬なども行われる。尚、慈善夫人は柏潔夫人とも呼ばれ、『大理府志』にも伝承の記載がある。

### 3-2 歴史上の人物——漢族——の伝承

唐天宝7年、南詔王皮邏閣は世を去り、息子の閣邏鳳が後を継ぐ。唐朝は雲南王の称号を与える。唐の雲南太守は閣邏鳳が後継者になることを妨害したため、閣と争い、殺される。天宝13年6月、唐朝は雲南郡都督兼劍南節度使李宓と広西府節度使に7万の軍を与え、南詔を攻めさせる。閣は吐蕃の力を借りてこれを迎え打つ。

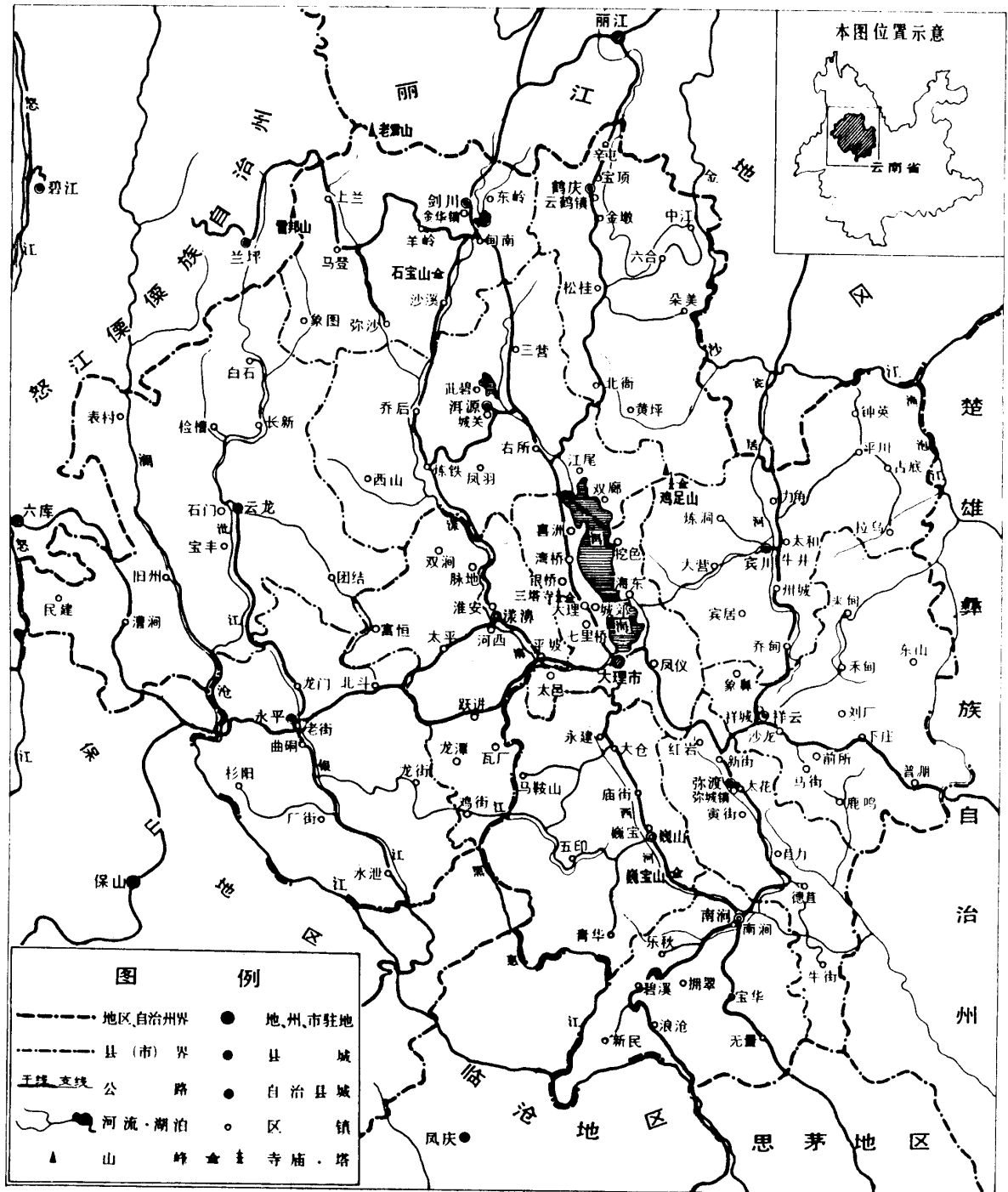
両軍は相對峙するが、戦いは始まらない。土地や水に不慣れな唐軍は軍中に疫病が蔓延し、食料も尽き、戦わずして飢えと病で多くの兵が死に、撤退を余儀なくされる。南詔軍は時至れりと吐蕃と共に攻撃し、唐軍は全滅する。李宓も死ぬ。

閣は「生雖禍之始、死乃怨之終。豈願前非而亡大禮。遂収亡将等屍、祭而葬之、以存舊恩。」(南詔德化碑)として、下関に「万人塚」を建てて弔った。

下関の上村の人々は李宓を「本主」として祀り、塑像を作り、廟を建てた。これが李宓將軍廟で、俗に將軍洞と呼ばれている。旧暦8月15日に廟会がひらかれる。

天宝の戦いによって李宓とその家族、武将が悲惨な最後をとげたため、白族は同情し、李宓を「本主」として祀ったほか、李宓の家族、五人の武将をも祀っている。それぞれの聖号は、「利濟將軍」(李宓)、「威鎮王爺」(李宓の息子)、「英武將軍」「白馬將軍」「忠孝將軍」「感應六爺」「先鋒七爺」である。李宓の七人の夫人は大理城東門の「本主」となっている、娘も長女は「大井水泉女神」、その夫は「大井四爺」、次女は「二井水泉女神」、孫娘は「金花宮主」の聖号を持ち、おのおの馬郷邑、下関紅土坡、下関西門などの村の「本主」となっている。將軍廟は蒼山斜陽峰の麓にある。李宓が「本主」として祀られてから久しいが、廟は明代の建築で、清代に再建されている。上村には今も李姓が多い。<sup>②</sup>

白族が敵将李宓を「本主」として祀った理由は様々に解釈されている。死者にたいする同情ととる説(大理市文化局 1988: 146)、唐朝に対しやむを得ず遠征軍を打ち破ったことを



大理白族自治州行政区划图

(「大理白族自治州概况」编写组 1986)

表明し、唐朝への友好を伝えたかったとする説(李 1984:55)、遠征軍の兵の多くは故郷に帰るすべがなく、大理に住み着き、李宓を祀ったとする説(同上:56)などがある大理に残らざるを得なかった唐朝の将兵が、民族を異にする少数集団の象徴として李宓を祀ったのであろうか。白族の側から見れば、非業の死を遂げた唐将の崇りを恐れたという御霊信仰にも似たものがあつたのではないだろうか。

#### 4. 仏教または道教の神

大黒天神は玉皇大帝の側近であつた。あるとき大帝は人間界に興味を持ち、見下ろすと、地上は春の盛り、美しさは例えようもなかつた。大帝はこれを妬み、人間界に疫病を撒き散らすことにした。この役目をおおせつかつた側近は、大帝は間違っていると思つたが、命令に背くことはできず、疫病のはいつた瓶を持って、人間界へ降りていった。人間界に着いたのはちょうど夜中だつた。側近は夜目にも美しい景色を眺めると、ますます疫病を撒くことがためらわれた。しかし、命に背けば死か、永遠に天牢に閉じ込められるかのいずれかである。考えるうちに、東の空が白みはじめ、人々が野良へ出かけていった。側近は自分が犠牲になるしかないと心に決め、疫病を飲み干した。途端に顔も身体も焼けて真っ黒になつた。

これを知つた太上老君は村人の夢枕に立ち、このことを知らせた。人々は感動し、側近を「本主」に祀り、「大黒天神」の名を奉つた。(雲南省民間文学集成弁公室 1986:145-148)

大黒天神は仏教の護法神であるが、大理、喜州、劍川などの「本主」となつている。この伝承のなかに登場する玉皇、太上老君は道教の神である。「本主」信仰と他宗教の錯綜した関係が見える。

## 四

以上見てきた如く、様々な性格を持った「本主」が祀られているわけであるが、「本主」信仰はいつ頃から始まつたのであろうか。多くの研究者が様々な説を出している。李纘緒(李 1984:56-57)によれば、「本主」崇拝の起源について、史書の記載は少ない。『新唐書・南詔伝』に、唐宗李適が劍南節度使韋及び判官崔を南詔国都羊苴咩城に派遣し、異牟尋と唐朝への帰属を協議した後、異牟尋は「使其子閻勸及清平官与時盟点蒼山、載書四：一藏神祠石室：一沈西洱水；一置祖廟；一進天子。」とある。『蛮書』がこの事を記した時、さらに「内一本敬献；一本異牟尋置於祖父等廟；一本置府庫中以示子孫，不令叛逆，不令侵略。」と述べている。この二冊の本の言う「神祠石室」「祖廟」が即ち「本主」廟である。王松本『南詔野史』に、「蒙氏平地方，封嶽瀆，以神明天子為国歩主，封十七賢，五十七山神。」、胡蔚本『南詔野史』にも「封十二聖賢為十二山神」と述べられている。更に、「異牟尋以天蒼山為中嶽，烏蛮(東川烏龍為東嶽，銀生府蒙東山為南嶽，又封南安州神石為南嶽，越賧(騰越)高黎貢山)

名崑崙隅)為西嶽, 嵩州雪山(一名玉龍山)為北嶽, 封金沙江, 瀾滄江, 黒惠江, 怒江為四瀆, 各建神廟。」と記されている。ここでいう封聖賢, 封山神はいずれも, 「本主」を分封することである。しかも五嶽四瀆を封じ, また「各建神廟」は「本主」廟を建てることを指している。これらの文献から, 南詔時代「本主」を分封するという社会の気風が旺盛であったことがうかがえる。例えば, 杜光庭は唐朝御吏であるが, 南詔に住み, 南詔との関係は極めて良く, 南詔に尊重されて, 死後は廟が建てられ, 「本主」に祀られている。鄭回ももとは唐朝の西瀘令であったが, 天宝の戦いで南詔の捕虜となった。南詔王閣邏鳳, 鳳伽異, 異牟尋は彼の博学多才を知って清平官に任じた。鄭回は南詔に唐への帰属を勧め, 四十年にわたる両者の敵対関係を終息させた。こうした功績により, 死後, 南詔は廟を建て, 「本主」に祀っている。最も早い「本主」はトーテム崇拜から変化してきたのであり, 六詔の時代「本主」崇拜はすでに基本的に確立, 定型化し, 南詔時代には広くゆきわたっていた。従って, 南詔時代は「本主」崇拜の最盛期であり, 「本主」神話が繁栄した時代といえよう。

張文勳(張 1983: 114-115)によれば, 樊綽の『蛮書』に, 貞元十年異牟尋と崔佐時の誓文が載っており, 「上請天, 地, 水三宮, 五嶽四瀆及管川谷諸神靈同請降臨, 永為証拠」とある。これは南詔政権建立後, 原始社会の氏族, 部落の保護神を統治に利用し, 徐々に「本主」崇拜が形成されていったと説明できよう。大理政権成立後, 段宗榜を「中央本主」とした。歴代の統治者も同様で, 元代大理国の遠征に赴き, 劍川で戦死した十八将が各村の「本主」に封じられ, 明初雲南土知州となった段保は雲龍の「本主」となっている。従って歴代の帝王宰相の類が大量に「本主」の中に組み込まれ, 中原の漢族さえ「本主」となっている。

いずれにしろ, 「本主」信仰は原始社会に源を発し, 南詔で形成され, 大理国で盛んになり, 元, 明で最も盛となった。

徐嘉瑞(徐 1979: 277, 279)は, 「本主」は大理特有の宗教で, 巫を祭師としている。南詔は仏教を統治に利用したほか, 「本主」をも利用した。南詔が六詔を統一後, それまで分散していた各小部族が一つの大部族に組織された。こうした政治統合の反映として, 宗教も一つの最高神によって統一された。大理に現存する「本主」廟は, その起源をたどるなら, 歴史が古く, 現在の大理の71村のほとんどが「本主」廟を有している。「本主」廟は「本村鬼主廟」の略と思われる。即ち, 古代各独立部族の宗教の遺跡である。この宗教はもとは羌族の原始宗教であると述べている。

李昆声, 祁慶富(李, 祁 1985: 106)は, 南詔の雲南統一以前, 洱海周辺の主要民族烏蛮, 白蛮が信仰していたのは原始的な巫鬼教であるが, 南詔統一後は外部から伝わった仏教が次第に巫鬼教にとってかわるようになった。しかし, 巫鬼教は消滅したわけではなく, 「本主」或いは「土主」崇拜の形式をとって存在し続けた。「本主」の多くは南詔時の人物であり, 「本主」崇拜は南詔に始まるとの説をとっている。

以上「本主」の起源に関する諸説を見てきた。多くが「本主」は南詔の時代に始まるとし



ている。しかし、その論拠とする文献の中に「本主」の文字がまったく出てこないのは、どうしたことであろうか。「本主」という名称そのものがかなり新しいものなのであろうか。また、中国西南地域の地方志を見ていくと「土主」の文字が見られる。「本主」は「土主」とも称し両者に区別はない（詹，張 1990：116）とする説もあるが、「本主」廟の中に「本主」とはべつに「土主」を祀っている例もある。さらに、「本主」の廟会で巫師が重要な役割を担っている。巫師は白族の原始宗教である鬼神崇拝において天地を祀る儀式をもとり行う。また、従来天鬼を祀る壇であったものが、後に「本主」の廟になったり、古代祭天の場所であった所に「本主」廟が建てられている例が見られる。「本主」の起源を考える際、巫師や鬼神崇拝との係わり、及び白族と隣接する他の民族の宗教との比較が必要であろう。

## 五

現段階で「本主」信仰の起源を特定することは難しいが、宋末元初、「本主」信仰は確かにあったと言うことは可能なようである。1982年、湖南省桑植県で土家族の調査が行われた際、白族が県内に居住していることが判明した。彼等は700年ほど前湖南省に移り住み、以後雲南とは没交渉だったという。本稿の最後に、湖南省白族の調査報告（谷 1983：56-63）を参考に白族の移動と大理から携えていった「本主」信仰について考えていきたい。

湖南省桑植県の馬合口、梅家橋、麦地坪、三屋迪一带に「民家人」が居住している。人口は約3万人。「民家」とは白族の古称である。姓は谷、王、鐘の三種で、いい伝えによれば、宋末元初、三姓の祖先が戦乱から逃れて長江を下り、洞庭湖を渡り、湖南の地に到着し、定住したという。以後長期にわたり漢族、土家族、苗族と雑居してきたが、固有の信仰「本主」信仰を保持し続けている。

桑植県の白族の「本主」は三姓が祀る大神、二神、三神（順に谷、王、鐘姓の「本主」）があり、他に各姓と各村の祀る「本主」がある。例えば、韋陀馬、公元師、関雲長、文昌、陳亮、陳吉、潘大公などである。これらの「本主」は塑像が作られ、更に神位が作られている。神位には「祖奉本主×××之神位」と記されている。

「本主」にはみな廟があり、きめられた日に廟会が開かれる。廟会には「本主」が廟から村へ迎えられ、村を練り歩く「游神」が行われる。廟会の時には市が開かれ、各民族が物資を持って集まる。歌や芝居、獅子舞い等も行われる。廟会の他に毎年正月にも「游神」が行われる。この時の「游神」を主宰するのは「三元老師」と呼ばれる巫師である。「本主」は輿に乗せられ、各地を練り歩く。正月に行われる「游神」は大理地区での「繞三靈」に該当すると思われる。

以上のような「本主」信仰を持つ桑植県の「民家」が湖南に移動してきた時期について、桑植県の谷、王、鐘三姓の族譜には、いずれも宋末元初に桑植県に到着したと記されている。谷氏族譜は、始祖均万公は宋徳佑元年（1275年）永定に到着したと記している。鐘氏族譜に

は至元五年（1268年）戦禍を逃れて桑植県に来たと記されている。馬曜など（馬 1983：101-103, 夏 1980：121）によれば、1253年フビライが大理国を攻め、1254年大理王段興智が捕虜となった。1258年蒙古軍は南宋を攻めることにし、雲南の軍も南宋攻めに加わるようになった。雲南の蒙古軍総督は白族等の兵で爨燹軍を組織し、段興智の叔父段福に率いさせた。1259年段福は湖北漢口でフビライの軍と合流したが、ほどなくフビライが蒙古の大汗となり、1261年段福の軍はようやく雲南に帰ったという。この記載に基づいて考えれば谷, 王, 鐘の始祖は段福軍の残留兵ということになる。

湖南省桑植県の白族の湖南への移動時期及び彼等の持っている「本主」信仰から考えて、少なくとも宋末元初には大理の地に「本主」信仰が行われていたことは間違いないであろう。

### 注

- ① 「大理白族自治州概況」編写組 1986：1には自治州内の自然村は11742と記されている。
- ② 李宓の伝承については雲南省社会科学院民族文学研究所の李績緒所長に懇切な教えを受けた。記して感謝の意を表します。

### 参 考 文 献

- 雲南省民間文学集成弁公室 1986『白族神話伝説集成』中国民間文芸出版社  
 大理市文化局 1988『白族本主神話』中国民間文芸出版社  
 大理白族自治州文化局 1984『白族民間故事選』海文芸出版社  
 大理州白族民間故事編輯組 1982『白族民間故事』雲南人民出版社  
 李星華 1982『白族民間故事伝説集』中国民間文芸出版社  
 1980『中国少数民族の昔話』三弥井書店  
 李績緒 1984『白族文学史略』中国民間文芸出版社  
 張文勳 1983『白族文学史』（修訂版）雲南人民出版社  
 徐嘉瑞 1979『大理古代文化史稿』三聯書店香港分店編輯部  
 李昆声他 1984『南詔史話』文物出版社  
 雲南省編輯組 1985『雲南民族民俗和宗教調査』雲南民族出版社  
 民族問題五種叢書雲南省編輯委員会 1983『白族社会歴史調査』雲南人民出版社  
 宋恩常 1983「白族の本主崇拜」『中国少数民族宗教』初編 雲南人民出版社  
 秋甫 1988「關於白族本主崇拜的調查与思考」『雲南社会科学』1988, 第3期 P 46-53  
 張旭 1981「白族原始宗教信仰——天鬼」『大理文化』1981, 第2期 P 24-27  
 李昆声 祁慶富 1985『南詔史話』文物出版社  
 谷成章 谷忠誠 1983「湖南桑植県民家人（白族）考察」『大理文化』1983, 第4期 P 56-63  
 曾士才 1986「雲南大理の龍神信仰と水利慣行」『地理』第31卷 第1号  
 「大理白族自治州概況」編写組 1986『大理白族自治州概況』雲南民族出版社  
 詹承緒, 張旭 1990『白族』民族出版社  
 馬曜主編 1983「雲南簡史」雲南人民出版社  
 夏光南 1980「元代雲南史地叢考」新文豊出版公司

資料 本主と祭祀する村

	地区	村名／廟名	本主	祭の期日
1	大理	大理市	細奴羅（南詔の祖）	2月18-23日
2		大理城西門村	鄭回父子（唐の役人，後南詔の清平官）	
3		大理城東門村	李宓の7人の妻	
4		大理城西門，北門村	阿南夫人，柏潔夫人（貞女）	
5		大理城南門村	王皮匠（皮職人）	
6		者摩郷	鳳伽尊	
7	七里橋	呈庄	大石（洪水で流れてきた）	2月23日
8		葭蓬村	大黄牛（洪水を堰き止めた）	
9		大匠，神通庄，陽和庄，羅久邑	七郎將軍（李宓の部下）	
10		北羅久邑	白官老爹（悪龍を懲らしめた老人）	7月24日
11		庄窰，大井盤村	鳳凰女神（灌漑水）	
12	銀橋	陽郷村	木のこぶ（洪水を止める）	8月23日
			青銅の仏像（堤防工事中に発見）	8月23日
13		鶴陽村	段思平（大理国建国）	8月10日
14		馬久邑	中央本主（中央皇帝，愛民皇帝，段宗榜）	4月25日
			張玉林（雨を降らす）	6月23日
15		沙栗木庄，慶安里村	傅友徳（明の將軍）楊高珍（水をもたらず）	
16		三陽村	阿傑弥（妖怪退治の若者）	
17		陽郷村	慧生（水をもたらず）	
18		下陽波村	張勳（李宓の部下）	6月25日
19		双鴛村	段（南詔の大官）	
20		幡曲村	杜（野良仕事を手伝う）	1月6日
21	城郊	上村／將軍洞	利濟將軍(李宓，唐朝の將軍) [威鎮五爺(李宓の息子)]	8月15日
			水夫娘娘(李宓の妻)，五人の將軍(李宓の部下，牛王，馬王，山神，財神]	
22		馬郷邑	大井水泉女神（李宓の娘），大井四爺（夫）	
23		下関紅土坡	二井水泉女神（李宓の次女）	
24		下関西門	金花宮王（李宓の孫娘）	
25		宝林村／龍神祠	白那陀龍王 [段赤城，張兵太子，土主，茶花太子，五位公子]	8月15-16日
26		打漁村／江風寺	風伯雨神	
27		打漁村	大黒龍，小黃龍	
28		打漁村／文昌宮	玉筆軍勝大王 [水神，火神]	
29		才村	四海龍王（雨を降らす）	
30		緑桃村	小黃龍（悪龍を退治）	
31		龍鳳村	小黃鯉魚（龍王）	
32		石屏村	段思平，赤子龍王（段思平の息子）	8月15日
33		大関邑，七五村	張榮進求（細奴羅の舅）	1月22-23日
34		龍龕村	世隆太子（南詔王）	
35		荷花，青平，宝鈴村	白那陀（水をもたらず）	8月15日
36		塔橋村	豊佑公主，段苴（南詔の王女と夫）	

37	塘子鋪	諸葛亮	
38	東邑	李定国 (清の農民起義軍の大將, 雨神)	
39	小邑庄, 瓦村	双子 (大理国の役人の息子), 聖母娘娘 (双子の恋人)	
40	吉祥村	県知事 (雨を降らす)	
41	湾橋	上湾橋, 下湾橋	大黒天神
42	劍邑	張向民 (李宓の部下)	2月13-15日
43	上陽溪	中央本主	
44	南庄	段奕淙 (南詔の清平官)	
45	甸中四村	赤子三爺 (天の星神の三男, 蝗を退治)	
46	内官村	石	9月12日
47	喜洲	市坪街, 市上街, 官充, 市戸街	愛民皇帝
47		染衣巷, 大界巷, 彩雲街	中央皇帝
48	喜洲鎮	建国皇帝 (段思平), 大黒天神, 阿靈帝母, 柏潔夫人, 洱河靈帝, 愛民皇帝, 三靈皇帝, 護国皇帝	
49	閣洞塆村	太陽神	
50	河埃城村	段赤城 (大蛇退治の英雄) [海螺神]	
51	周城鎮	杜朝選 ( " ), 段隆	
52	坡頭村	白姐阿妹 (段思平の母)	
53	慶洞村	愛民皇帝	4月23-25日
54	上作邑	蔭民皇帝	
55	金圭寺	大黒天神	
56	星登, 新生邑村	小夫妻	
57	海東	文武, 玉龍, 三曲村	金江聖母 (金沙龍王の三姉妹)
58		文筆村	阿亮 (南詔の兵), 母
59		三星太子 (妖猿退治)	1月5-25日
60		伊阿蓋	3月8日,
61		老婆 (水をもたらず)	7月23日
62	挖色	古孟州城大漬棚, 大城曲	砂漠大王
63		挖色街當中, 營尾, 海印	李敬成 (田を守る)
64		大城曲村	海神姑娘 (洪水を治める)
65		挖色鎮楊姓	楊千貞 (大義寧国建国)
66		官邑	昌国佑民鐘英景帝
67		古孟州城	托塔李天王 (李靖, 水をもたらず)
68		康廊村	大禹
69		高興村	玄徳聖母 (子授け)
70		古孟州城, 各庄	孟優 (薬神)
71		小城曲, 官邑	李珠
72		神上甸	楊守正 (明の將軍)
73	鳳儀	普和村	金江聖母 [紅生青緑二官, 新王太子]
74		雲浪, 許長, 麻地村	蘇髻大龍王

白族の本主信仰

75	本長村	伽藍（大海天神）[新王太子，財神趙公元，三姑娘娘]	1月12日
76	長髮村	龍王	1月17日
77	華宮村	李宓の部下 [三霄聖母，豆豆哥哥，田公地母]	8月12日
78	東山村，慈航，蓑衣村，敬天，米中村	東方天王	1月10-23日
79	石坪村	龍王太子	1月23日
80	三哨，吉祥，新，大小赤仏	世隆	1，7，10月15日
81	滿江，黃瓜，新村	杜光庭	
82	后山村	楊勝修	
83	北湯天村	董法官（水をもたらす）	
84	南湯天村	楊学儉	
85	山西村	東海龍王，段氏 [土主，子孫娘娘，山神]	8月23-25日
86	南海廟	茶花太子(南海老公公) [仏家老爺(父)，伽藍，六半官，牛王，馬王，豚王，鷄王，羊王]	8月21-24日
87	応海廟	龍王太子[赤子三爺，鎮龍関將軍火龍太子，新王太子，総兵官]	
88	金星村	金天聖母，李宓 [牛王，馬王，山神]	1月8日
89	西窯村	会康皇帝，金四太太，三哨聖母，伽藍 [財神，山神]	
90	地石村	赤封，如意宝珠，興旺太子，転京太子，茶花太子	1月12-14日
91	西羊廠	水府龍王，金氏太太，新王太子，董王総兵官	1月9-11日
92	鳳者村	赤子龍王 [風伯雨師，李宓，李宓の武將]	1月8-10日
93	鳳鳴鎮	張公健（李宓の部下）	
94	洱源 双廊	名前の記載無し	1月4日
95	大王廟	〃	1月1日
96	古所，上村	趙善政（大天興国建国）	
97	鳳羽雪梨村	趙德方	1月12日
98	城関木南村	禄豊皇帝	1月6日
99	鳳羽街	禄豊人	2月1-12日
100	西山	九姉妹，石	
101	大欖篩村	閻羅鳳	
102	庄上，鉄甲	段思平	
103	鳳河郷	楊干貞	
104	雲龍 宝豊	三崇建国鷄足皇帝	
105	劍河 上宝甸，下宝甸，甸尾街	三老爺太子皇帝	
106	漢登村	大聖石碑阿弥勒皇帝	
107	下王村	易提坪得道龍王	
108	江長渡	馬祖龍王	
109	龍門邑	大聖本祖的姐姐，聖妃黎帝母	
110	白塔山	大黒天神	
111	甸尾街	二老爺太子皇帝	
112	蘭洲	需民景帝	
113	求仁甸	雪班皇帝	
114	—	福応景帝	

115	營村	閻闔皇帝	
116	中科, 山南	董君景帝	
117	下沐邑, 上沐邑, 江尾村, 前山屯, 留銀村	赤子景帝 (唐の大官)	7月23-29日
118	—	新爺太子	
119	—	大聖威靜辺塵衛国聖母	
120	—	建国梵僧觀音菩薩	
121	城北二里地	滄浪神	
122	金華山, 神登村	靈帝廟	
123	鶴慶 甸南	十七姊妹	
124	甸北	十八將軍	
125	—	千感靈 (楊千貞)	
126	—	護北景帝 (雪山太子)	
127	—	善由景帝 (王景仁豊)	
128	西山廟	徐達	
129	東嶽廟	宣德阜景明帝	
130	東山廟	韓成	
131	双水潮	趙德勝	
132	松桂	傅友德	
133	王相日村	常遇春	
134	白馬廟, 極窩村	水草大王 (漁業の神)	
135	段家阱, 波羅村	五谷娘娘 (五谷神)	7月15日
136	白馬廟, 北山河, 東坡村	白馬將軍	
137	和邑村	阿利帝母	
138	姜官屯, 北橋頭, 水路鋪	黃龍老爺	
139	小水溪村	母鷄龍王 (小白龍)	
140	高家營, 穗德, 長康鋪	黑龍大爺	
141	趙屯, 頒榜村	黑龍二爺	
142	田屯	黑龍三爺	
143	化龍村, 高家登, 鶴翼庄	溫水龍大, 溫水聖母	
144	桃樹河, 新科, 松樹曲, 邑頭村	羊龍老爺	
145	河頭, 三義村	白龍老爺, 白龍公子, 白龍娘娘, 雪山太子護白景帝	
146	南邑, 北邑, 綱常河	黑龍水德潤恩治域昭帝 [黑龍新爺衛境靈帝, 西海龍王, 青旗公子, 青旗娘娘, 介莫山神]	
147	雪鹿村	馬耳龍神	
148	波羅村	応水龍王	
149	家登村	龍女三娘	
150	栗木阱, 大龍潭	黃龍大公	
151	水寨村	小黑龍	
152	北衛村	白石老爺 (白石將軍)	
153	逢密村	青龍太子	

白族の本主信仰

154	小馬廠	黃花老祖爺（黃牛）
155	馬廠	前山大王毛牛王
156	板橋，文星，象吉，平洛，小教場，曲洛邑	柏節夫人
157	曲洛邑	大力神，二力神
158	趙家登，奇雲邑，南庄，大平場	灌口二郎（二郎神）
159	城関鎮	張老人（貧しい老人）
160	秀邑，迎春尾，羅偉邑	西山大爺，西山二爺（元朝の軍人）
161	天赦坪，梁營，王營，官庄	西山大爺
162	甸南慶和，北登，荆高登	西山三爺（元朝の軍人）
163	大水漾，水路鋪，石朶河，七坪，岩窯，白臉石，洪家窩，水井	
164	金鎖，下庄，太邑，上下潘屯	千感靈老爺（楊干貞）
165	麻地阱	金花姑娘，銀花小姐
166	彭屯	鉄甲將軍（朱元璋の部下李文忠）
167	波南河，建邑	落布玄王金甲將軍
168	天赦坪	青旗將軍
169	和邑，迎邑，上庄	阿利帝母
170	母屯	朱元璋の甥
171	何順村	大聖西天金光阿利地母聖妃白姐
172	四庄，赤鋪，大登，南干弓，北干弓	東官賢慕獲徳將軍
173	湯菁，穗徳，施酢，姜營	趙善政
174	三貝河，大夫屯	総統將軍
175	柳樹村	鎮北利主海龍將軍
176	双龍，北水潮，双水潮	西岳巡江帝主八部元帥
177	莫化関，茶木	北方天王（元のフビライの四天王の一人）
178	義明村	総督神靈感大將軍
179	大龍溪	二塘共并海河將軍
180	南窩，北窩	葉落挂印將軍
181	柳緑河	雪山大帝蔑蘿挂將軍
182	新登村	楊四將軍
183	辛屯	新爺太子
184	四登村	武侯將軍
185	波頭邑，奇雲邑，永安，南登，光前，高家坡	雪山太子護白景帝，雪山娘娘（母）
186	古楽村	石宝大老爺，靈山二爺，三爺，大娘，二娘，三娘
187	小犹龍，大犹龍，金塘，老干場，九里河	密息石馬大將軍

188	山脚村	大老爺	
189	河頭村	二老爺	
190	下登, 施家登, 西登	三老爺	
191	上吉, 旧地基	四老爺	
192	木扎蠟	五老爺	
193	曲江	鎮江王	
194	天王廟	李靖王	
195	銀河, 金敦	三爺 (藍李子)	
196	松桂街	傳友徳, 二娘娘, 三娘娘	
197	羊圈, 水井, 新窩	白王 (段平章)	
198	朶美街	金珠老爺, 阿醉太子, 阿醉娘娘	
199	水塘, 雲合	阿醉太子, 阿醉娘娘	
200	沙須	護谷天子	
201	鼎城鎮, 羊毛村	伽藍 (大黒天神)	
202	賓川 賓居大王廟村	張敬 (羅刹退治の老人)	3月15-20日
203	昆明 龍潭, 沙朗	大黒天神	
204	巍山 新村	細奴羅	
205	弥渡 城西	蒙世隆	

注：上記の表は「雲南民族民俗和宗教調査」雲南民族出版社 1985, 「白族社会歴史調査」雲南人民出版社 1983, 「白族本主神話」中国民間文芸出版社 1988, 「白族」民族出版社 1990年 等をもとに作成した。表中, ( ) は本主の別称または本主に祀られた理由, [ ] は本主ではないが本主と共に祀られている神を記した。